

コミュニケーション力の発達促進を目的とする「遊び」の活用

ー音楽療法における「演奏すること」と「遊び」の関連性を考えるー

高橋 真喜子

要旨

幼児にとって「遊ぶこと」は内的世界と外的現実を関連付ける作業であり、社会との関わりを持つための入口となる。この遊びの領域があることにより、幼児は幻想の世界に閉じこもることも外的現実に取り込まれて自己を見失うこともなく、外的対象と関わりながら現実を受け入れられるようになるのである。

遊びの領域に他者の領域が重なり合うとき、情緒的な繋がりが生まれ、相互にコミュニケーションが可能となる。従って、遊びの領域が十分に発達していない場合や著しく損なわれた状態にあるときには、他者と互いの領域を重ね合わせて関わり合うことができず、孤立した状態におかれることになる。つまり、遊べない状態にある幼児を遊べるように導くことが、コミュニケーション力の向上に繋がると考えられる。

音楽療法においては、「演奏すること」が共有の遊びの領域となる。その中でセラピストはクライアントの演奏に同調しつつ、情緒的繋がりを作り、演奏を通してコミュニケーションの在り方を示すことになるのである。

本論文では、自閉症者のコミュニケーション障がいの原因は情緒の問題であると主張するホブソンの理論をもとに、ウィニコットの「遊び」と「情緒」の関連性を検討したのちに、重度発達障がい児との音楽療法の症例を通して「演奏すること」を「遊び」の観点から考察し、コミュニケーション力向上を目的とした音楽の活用方法を探究した。

キーワード：遊び，演奏，コミュニケーション，情緒的繋がり，音楽療法

1. 序

1.1. 遊びと情緒的関わり

幼稚園に通い始めた我が子が他の園児と仲よく遊んでいる姿を見て、母親が「さっきの子はお友達？」と子どもに聞いてみたら、「友達じゃない」と、そっけなく言われたという話をよく聞く。さっきまであんなに仲良く遊んでいたのに、なぜ友達ではないのだろうか。

ウィニコット¹⁾ (1971) は、「子どもは遊びの中で友達を作ったり、または敵を作ったりするが、遊びを離れると容易に友達を作ることができない」と述べている。何故なら、子どもは遊びを離れると、相手と情緒的な繋がりを作れないからである。「あの子は友達じゃない」と答えた園児の言葉は、遊びから離れた「今」はその子と情緒的交流がないため、「友達ではない」と

率直に自分の心情を語っているのだろう。つまり、子どもが発達に必要な社会的接触を持つためには、情緒的な関係を持ちやすくする「遊び」が必要なのである。

一方、子どもが集まれば自然と生まれる遊びが、自閉症児達の間には見られない。これを、ウィニコットが論ずる「遊び」の観点から見ると、自閉症児達の中に情緒的接触がないことが、「遊びの欠如」という形で現れていると理解できる。例えば、一緒にいても一緒にいるような気持ちがしない。気持ちが通じ合うように感じられない。これらは、自閉症児と接する際に我々の多くが感じることだが、「自閉症児は他者と心が通い合っているという感覚が極めて乏しい」²⁾ (Hobson, 1993) ために、人と相互的に関わり合うことができず、「遊び」も生まれないのである。

1.2. ホブソンの「情緒の役割」

ホブソン³⁾ (1989, 1993) は、発達精神病理学の観点から、「他者と情動的に関わっていくことにおいて深刻な障がいをもっていることが、自閉症者に特徴的な認知や言語の障がい、ならびにコミュニケーション障がいの大部分を引き起こす」と論じている。通常、乳幼児は、他者と情緒的交流を通して、他者の心がわかるようになっていく。だが、自閉症児の場合は、人と情緒的に関わり合うことができないために、人は自分と同じように物事を感じ、考え、行動する存在であるということに気付かない。その結果、相手の態度からその人の意図を読み取れないばかりか、そこに意図があることにも気付かない⁴⁾ (Trevarthen et. al, 1997)。そのため、人々が何故そのように行動するのかを理解できず、社会的に適切な行動をとることが非常に困難となる。また、「本来コミュニケーションとは人との心理的つながりを作る働きをしているものであり、喜びの感じられる心の絆を築きたいという思いが乳幼児のコミュニケーションの動機となっているが、他者と情緒的関係が持てない自閉症児には、…どのようにコミュニケーションが成立するかが理解できず、言語の適切な使用方法を獲得できない」とホブソンは述べている。

このように、情緒の問題が、「人間らしく社会生活を送るための基本的部分」(Hobson, 1993) の発達を妨げてしまっている。ホブソンが主張するように、他者と情緒的接触を持てないことが自閉症という障がいの主要原因だとすると、自閉症児の社会性・コミュニケーション力の発達促進のためには、彼らが他者と情緒的な繋がりを体験できる環境を提供することから始める必要がある。そのための最適な方法の一つとして、音楽という情緒的な媒体を介してクライアントと接触し、相互作用する音楽療法が挙げられる。なぜなら、音楽療法は、音楽療法士（以後セラピストと記載する）がクライアントの行動や演奏に合わせて即興演奏することで情緒的接触を持ち、一緒に演奏できるように導きながら「遊び」を生み出していくものだからである。

本稿では、「遊び」を育む最初期の母子関係が、いかに音楽療法において再現されるかを説明し、重度の発達障がいと診断された3歳10か月の女兒との音楽療法の症例を通して、セラピストの役割と音楽療法がもたらす効果について考察していく。

1.3. ウィニコットの「遊ぶこと」

乳児は、母親（以後、乳幼児の主要養育者を、性別に関係なく母親と記載）の表情を真似したり、ガラガラをしゃぶって遊んだりしている。少し成長すると、おもちゃの車を走らせたり、砂場で山を作ったりするようになり、おままごとや戦いごっこなど、より複雑で創造的な遊びへと発展していく。このように、乳幼児の遊びは、成長と共に変化していくが、どの遊びも自分の外側にある対象を使って行われている。「単に考えたり欲したりするだけでなく、物事を行うのが遊び」であり、遊びの中で自分が今まで経験したことや感じてきたことを、外の世界に存在する対象と実際にやりとりさせながら、乳幼児は世の中を知っていくと、ウィニコットは述べている。そして、「遊びは、母親との情緒的関わりの中で生まれる」という。

母親は、生後間もない乳児の欲求に対して非常に敏感である。赤ちゃんがお腹を空かせば授乳し、泣いていたら抱っこする。生まれたばかりの乳児にとっては、身体的ケアが、母親から受け取ることができる唯一の愛情表現であるため、授乳や抱っこが極めて重要な情緒的経験をもたらす。乳児は、自分の欲求が満たされることで得られる身体的満足感を、母親によってもたらされたとは認識せず、自分一人のものとして経験する。自分には、全てが思い通りになる魔法の力があるかのように錯覚するのである。それによって、乳児は自分の存在や影響力に自信を持てるようになり、実際に物事を支配できることを楽しむようになる。これが遊びの始まりである。

しかし、魔法の力はそのまま続くものではなく、乳児の成長と共に、母親は、徐々に幼児の欲求通りには応じられなくなっていく。お腹が空いているのに授乳を待たされる、自分を見て欲しいときに振り向いてもらえないなど、自分の求めるものと得られるもの間にズレが生じる。しかし、このズレによって、乳児は自分には魔法の力はないという現実を知ると同時に、母親が思い通りになる自分の一部のような存在ではなく、別個の人間だと気付かされる。こうして、母親が自分の外側に位置づけられることにより、母親と現実的なやりとりを行う「相互的な遊び」が生まれ、乳児は母親がまわりの人々や世界に対してどのような態度をとっているのかを遊びの中に反映させながら、社会の現実を理解していくことが可能となるのである。

1.4. 音楽と心の波

乳児は、母親の感情を、しぐさや表情、発声から感じ取っている。それは、喜び、悲しみ、怒りなどと分類される感情ではなく、時間の流れに沿って膨らんだり縮んだり、速くなったり遅くなったり、騒めいたりする、感情の波のことである⁵⁾ (Stern, 1985)。母親の感情の波は、動作や表情、発声と連動して自然と外側に表れる。例えば、腕の動きの速さや強さ、リズム、そして動きが描く輪郭が、内面の情動状態を映し出すのである。乳児が母親と接触するとき、母親の内面で起きている波と似たような感情の波が乳児の中に引き起こされ、乳児は母親と同じような感じ方を体験する。このように、母親の感情の波と自然に同調できることで、乳児は母親が自分と同じ情緒的な存在であることに気付くと同時に、母親と情緒的に関わり合うことに喜びを感じるようになる (Stern, 1985)。

音楽と感情の波は非常に似ている。広がったり狭まったり、弾んだり深くなったりなど、音の動きや強さ、音の流れが描く輪郭、リズムやタイミングが、私たちの内側に同じような感情の波を引き起こす^{6) 7)} (Pavlicevic, 1990, 1997)。それゆえ、音楽を聞きながら自分の感情を重ね合わせることも、さらには自分がどのように感じるかを、音の動きや強さ、形、リズムやタイミングの変化を音楽に織り込みながら表現することもできる。このように、母親と乳児が、互いのしぐさや発声を通して情緒的に関わり合うように、演奏を通して人と人が情緒を共有し合うことが可能なのである。

1.5. 音楽と情緒の共有

音楽の演奏は、初期の情緒的交流を再現できるだけでなく、他者と情緒的関係を持つことの困難さなど、自閉症児のありのままの姿を映し出すものでもある。特に、即興演奏のときにそれが顕著に表れる。例えば、演奏が聞こえていないかのような行動をとったり、一緒に演奏するのが困難であったり、あるいは、一緒に演奏ができてセラピストの模倣の域から出られず、リズムやメロディーの変化が作り出させなかったりする。また、多くの場合、自分の演奏が自己表現だという認識がなく、セラピストが自分の行為を意味あるものとして受け止めていることに気付いていないため、一緒に音を出していても、心の通った演奏に感じられない。つまり、「遊び」がないのである。しかし、自閉症児は情緒的接触を好まないのではなく、例えば、偶然同じタイミングで最後の音を鳴らしたり、自分の体の揺らしと音楽がぴったり合っていることに気付いたとき、笑ったり歓声をあげたりなどして、他者との情緒的な接触に喜びや満足を感じている。

このように、他者との情緒共有を十分に経験できない自閉症児に、音楽という媒体を通して、コミュニケーション発達の出発点である「一緒に感じ合う」ことを体験させてあげることが可能である。そのためには、母親が生まれたばかりの乳児にするように、まずは自閉症児の世界にこちらから合わせていくことから始めなければならないと考える。なぜなら、そこから「遊び」が生まれるからである。

2. 症例：経過と結果

2.1. 対象の女児（Aちゃん）

Aちゃん（3歳10か月）は、重度発達障がいと診断され、特別支援学校内の幼児学級に通っていた。歩行が安定しないため、主な移動手段は這い這いだった。Aちゃんは誰かと目を合わせることがほとんどなく、話しかけてもまるで聞こえていないかのように反応を示さなかった。家では、這い這いしながら、次々とおもちゃを手にとって弄るが、お母さんが一緒に遊ぼうとすると、スーッとどこかへ行ってしまう。お母さんは、Aちゃんのことを、誰ともつながりを持とうとせず、人の輪から外れて漂っているだけの「捉えどころのない子」と表現していた。また、Aちゃんが人とコミュニケーションを取れないことだけでなく、コミュニケーションが取れないために引き起こされる心の問題の方も心配していた。お母さんによると、Aちゃんは

イライラすることがあるという。でも、Aちゃんが何かを訴えてくることも、要求することもしないため、何を思っているのか、何をしたいのかを理解できず、助けてあげられないことに悩んでいた。

2.2. 音楽療法セッションの目的

お母さんの強い希望で、Aちゃんのコミュニケーション力育成のため、そして人との「心の交流」を体験させてあげるために、音楽療法が開始された。

2.3. セッションの場所と頻度

Aちゃんの通う特別支援学校の音楽室（約60㎡）で、月に2回、約30分の個別セッションを（夏休みなど、学校の休みを挟みながら）1年10か月に渡って行った⁽¹⁾。

Aちゃんがコミュニケーションというものを知っていくためには、自由に動き回って自発的に人と関わりあえる環境が必要だと考え、机を倒してバリケードにして、Aちゃんがどこにいても、彼女の呼吸やちょっとした発声が聞き取れるぐらいの小さな空間を作った。Aちゃんが広い音楽室内を自由に行動することになれば、彼女の注意を私との関係に繋ぎ留めておくことが難しくなるからである。さらに、Aちゃんが自由に好きなものを手にできるように、タンバリンやマラカスなど、軽くて小さな楽器を床の上に並べた（図1）。

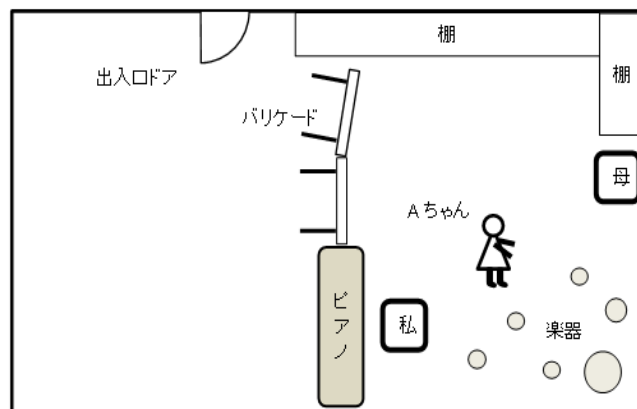


図1 セッション時の音楽室の配置
(2年目2学期に母親がセッションに参加した際の母親の位置も示してある。)

2.4. 経過

2.4.1. 1年目1学期

Aちゃんは、音楽療法の空間に降ろされると、すぐに楽器を順番に触り始めた。私（セラピスト=筆者）が「こんにちはこの歌」を歌い始めると動きを止めてじっと聴き入ったが、歌が終わるとすぐに楽器を弄りだした。私は、ピアノを弾きながら静かに歌った。メロディーやハーモニーに変化をつけるとAちゃんはチラッとこちらを見たが、単に珍しい音に注意を払ったという様子だった。Aちゃんの隣に座り、そっとタンバリンを叩いて見せても、彼女はそれには全く気付かない素振りで、せっせと楽器を弄って回っていた。Aちゃんの真似をして撥を回したり、ドラムを叩いたりしてみても、Aちゃんは私のやっていることに注意を払うこともなく、次から次へと楽器を渡り歩いていた。タンバリンを手を取ったと思うと、すぐに床に戻してマラカスに手を伸ばす。と思うと、ドラムまで這い這いして行って触り、隣にあるベルを一瞬だけ手にして、撥をしゃぶり始める。一つの楽器を継続的に弄ることがなく、それぞれの楽器で何ができるのかを探究しているようでもない。楽器を手にするときに音が鳴るが、意図的に音を出しているようにも感じられない。ただ、楽器から楽器へと心の赴くままに動き回っているだけで、一つ一つの行為に関連性がなく、まるで断片の寄せ集めのような様子だった。そのため、い

ったい何をしているのか、何がしたいのかなど、彼女の気持ちがどこにも見えなかった。

私は、ピアノを使って、とりとめもなく続いていくAちゃんの行動を音楽で描写することにしました。それは、そうすることで彼女の断片的な世界を繋ぎ合わせていくと同時に、私の方から彼女の世界と一緒に体験し、彼女がどのような世界に生きているのかを理解しようと思ったからである。私は、Aちゃんの動きの速さやリズム、大きさや強さを音楽に取り入れて表現した。そしてAちゃんが違う動作をしたり、違う楽器を手を取ったりしたとき、メロディーや和音、リズムに変化をつけることで描写した。例えば、Aちゃんが目を細めてマラカスをしゃぶっているときには、はっきりとしたメロディーやリズムを作らずに、不協和音を使ってゆっくりと漂うように演奏した。「ハッ、ハッ。」と息を弾ませながら這い這いを始めれば、少し拍を感じさせるような演奏に変えた。そして、撥を両手で挟んでクルクル回したり、床の上を前後に転がしたりするときには、撥の動きに合わせて、あたかも回転しているように「ソファミレミファ…」と演奏した。彼女の行動に合わせて演奏している私の音楽は、次から次へとメロディーや和音が変わり、取り留めもなく続くだけで、どこに向かっているのか、どこまで続くのかが見えなかった。また、高音だけを使って静かな音で弾いているため、何か物足りなく、不安定に感じた。かといって、低音を使ってしっかりとした、線の太い、安定した演奏をすると、彼女の状態と掛け離れた音楽になってしまう。彼女の世界を描写するためには、たとえ焦点のぼやけた音楽となっても、彼女の姿をありのまま音にしていく必要があった。

音楽療法を始めてから3か月が過ぎた頃、セッションがまもなく終わろうというときに、Aちゃんはマットの上に体を投げ出し、苦悩しているかのように両手で頭を抱えて体全体を左右に揺らし始めた。私はその動きに合わせてピアノを弾いた。短調の和声を用いながら「タンタ、タンタ」のリズムを繰り返していると、Aちゃんの体の動きが強く激しくなっていた。彼女の感情が音楽によって方向づけられ、はっきりとした形になって表れたようだった。ときおり、Aちゃんはフツと力を抜いては、また目をギュッとつむって、もだえるように大きく振っていた。彼女の小さな体のどこに、このような強さがあったのかと思うぐらいの激しさだった。私は、Aちゃんが強く振ったり弱く振ったりする動きに合わせて即興演奏を続けた。徐々に激しさが治まっていき、Aちゃんの動きが止まった。私は、演奏を「さよならの歌」に変えてセッションを終わらせた。歌が終わっても、Aちゃんは床の上で放心したように宙を見つめていた。音楽との一体感を、彼女は初めて経験したようだった。

2.4.2. 1年目2学期

ある日、Aちゃんは暖房器につかまって立ち、体を左右に振り始めた。すぐに止まって暖房器をちょっと触り、また同じように振り始めた。私は彼女の動きに合わせてピアノを弾いた。彼女が止まれば私も演奏を中断し、彼女が体を振り始めるのに合わせてメロディーの続きを演奏した。Aちゃんは、ときおり音楽がフツと聞こえなくなることに気付いたようだった。動きを止めて、耳を澄ますようにじっとしていた。次は、ちょっとだけ体を振って止まり、またじっと耳を澄ませた。音楽もちょっとだけ鳴って止まった。Aちゃんは、自分の体の動きに合わ

せて音楽が鳴ったり止まったりすることを確かめようとするかのように、じっと耳を澄ませては体を振るという動作を何度も繰り返していた。

その後のセッションで、私がちょっと視線を他に向けたときに、Aちゃんは暖房器につかまって体を振り始めた。慌てて演奏しようとしたとき、Aちゃんは振り返って「キッ」と私を責めるように睨み付け、再び体を振り始めた。私も、一緒に弾き始めた。彼女は、自分の動きでピアノ演奏をコントロールする力を持っていることを楽しんでいるようだった。

2学期最後のセッションで、Aちゃんはいろいろな楽器や撥を順番に放り投げるようにして落とし始めた。そのうちに、大きな音の出るマラカスとタンバリンばかりを床に落とすようになった。わざと大きな音を立てようとしているようだった。低い位置から落としたり、高く掲げてから落としたり、ポーンと高く放り投げたり、いろいろな落とし方を試しては耳を澄ませている。彼女は意図的に楽器を扱っているようだった。

2.4.3. 1年目3学期

Aちゃんはピアノのところへやってきて、鍵盤を押し始めた。そして、私に背中をグッと押し付けてきた。「膝に乗りたい」と意思表示しているようだったので、彼女を膝に乗せた。Aちゃんは、「パラパラ」と小さく音を鳴らしていた。私は、彼女の音がすぐに消えてしまわないように、ピアノのダンパーペダルを踏んで音を響かせた。そして、彼女を挟むように、ピアノの両端の鍵盤を使って小さな音で和音とメロディーを弾いた。しばらくすると、Aちゃんは両手を振り下ろして「バーン」と大きな音を鳴らし、すぐに鍵盤に耳を押し当ててその音が消えていくのを聞いていた。Aちゃんの音がだんだん消えていくのに合わせて、私も演奏を小さく弱くしていった。ピアノの音が消えかけると、Aちゃんはパッと体を起こし、足でピアノをバンバン蹴っ飛ばしながら両手を鍵盤に叩き付けた。まるで「もっと、もっと」と促しているようだった。私はそれに応えて、音量を上げ、規則的な拍でしっかりと和音を鳴らした。Aちゃんは、また鍵盤に耳を押し当てて自分の音が消えていくのを聞き、私も自分の演奏を小さく弱くしていった。これを何度も繰り返した。

その後のセッションで、Aちゃんはピアノを弾いている私の手をジッと見たあと、私の弾く鍵盤と一緒に押し始めた。Aちゃんが真似しやすいように「ド、レ、ミ、…」とゆっくり弾いてあげると、彼女は私の弾いた鍵盤を後から後から真似して押していった。

2.4.4. 2年目2学期

2学期の終わり頃、Aちゃんのお母さんがセッションの様子を見に来た。お母さんが、バリーケードの外から見学すると、Aちゃんからよく見えて落ち着かないと考え、お母さんも中に入って参加する形をとることにした。お母さんはピアノの反対側の壁を背にして座り、私とお母さんとで、Aちゃんや楽器を挟むような形でセッションが始まった(図1)。はじめAちゃんはお母さんが気になるようで、楽器に、いつものように集中できずにいた。しばらくチラチラとお母さんの方を見ながら楽器を触って回った後、お母さんと私の中間あたりで、お母さんの方を向いて寝転がった。お母さんは、穏やかな表情で黙ってAちゃんを見詰めていた。私にはA

ちゃんの背中しか見えなかったが、二人はずっと見つめ合っているようだった。私は、Aちゃんを、私との音楽のやりとりに引き戻すのではなく、Aちゃんとお母さんの間に流れる親密でゆったりした時間を、即興演奏で表現することにした。そうすることで、互いに相手を感じ合う時間を作り出そうと思ったのである。私は左手で短調の和音を静かに弾きながら、右手でゆっくりとメロディーを奏でた。二人は、ずっと同じ姿勢で見詰め合い、私はそんな二人を見ながら、静かにゆっくりとピアノを弾き続けた。そろそろセッションが終わろうとする頃、初めてお母さんの顔に優しい笑顔が広がった。Aちゃんが微笑んだようだった。私はそれを見て、そっと音楽を転調させた。すると、Aちゃんがクルッと振り向き、嬉しそうに私を見た。そして、仰向きになり、交互にお母さんと私を見ていた。私は、少しだけ音量を上げ、メロディーに変化を加えて、Aちゃんの嬉しそうな表情に応えた。そのまま「さよならの歌」を歌い、セッションを終わらせた。セッション後、お母さんは興奮した面持ちで、「娘のことを、こんなに強く近く感じたことはなかった。」「今までも、『この子は、私と一緒にいることを嬉しく思っているようだ』と感じたことはあったけれど、今日のように娘の気持ちが自分に向けられているのをはっきりと感じたことはなかった」と語った。私は、Aちゃんと見つめ合うお母さんの表情から伝わってくる愛情を音楽にして、二人に映し返していた。その音楽を通して、お母さんは自分の投げかけたAちゃんへの愛情が返ってくるのを感じ、またAちゃんもお母さんを目と耳の両器官から感じとり、より強くお母さんの存在を強く感じられたのだといえよう。

2.4.5. 2年目3学期（最後のセッション）

セッションが始まって少し経ったとき、Aちゃんは私の膝に乗ってきた。「ポロン。ポロン」と指先でピアノを鳴らしていたが、すぐに止めて私を見上げると、私の髪を触ろうと手を伸ばしてきた。Aちゃんは、私の右腕に背中をもたせ掛け、私を見上げながら私の髪にそっと触れていた。私は静かにゆっくりと、短調の和音を弾き、小さくハミングしながらAちゃんに歌い掛けた。Aちゃんは、私の顔も触り始めた。私の額や頬、そして唇や顎をなでた。Aちゃんのようにさせ、私は静かにハミングを続けた。しばらくすると、Aちゃんの顔に笑顔が広がった。私は、それまで弾いていた短調の和音を長調に変えてAちゃんの笑顔に応えた。Aちゃんはそのまま、笑顔で私の顔を触り続けた。ときどき嬉しそうに体をのけ反らせて体を揺らし、そしてまた私の顔を触っていた。今度は、私の胸にもたれかかり、頭を左右に回しながら体を揺らし始めた。それに合わせて、私は小さな音で「タンタ、タンタ」と弾きながら、ハミングを続けた。少しすると、Aちゃんは「プー」と息を吐き始め、私は「アー」と少しはっきり発音しながら歌うことで応えた。するとAちゃんは、嬉しそうに私の顔を見上げ、また私の顔をなでた。私はゆっくりと和音を弾きながら優しくハミングし、Aちゃんの嬉しそうな表情を映し返していった。Aちゃんが、この日が私たちの最後のセッションであることを理解していたかはわからないが、私たちは初めて直接的な関わり合いを持つことができた。この最後のセッションで、私はAちゃんと、最も初期の母子の関わり合いに到達したように感じた。

このあと、Aちゃんは床の上でマラカスを弄っていたが、手が滑ってマラカスが私の方へ転

がってきた。私は、それを受け取り、Aちゃんに転がして返した。すると、Aちゃんも私と同じように、マラカスを私の方へ向けて転がした。初めてのキャッチボールだった。私たちは、このマラカスのやりとりを数回行い、そして静かにセッションが終わった。

2.4.6. 音楽療法を終えて

3歳10か月で音楽療法を始めたAちゃんは、5歳7か月になっていた。教室でのAちゃんは、相変わらず一人で部屋に置かれているおもちゃを弄って遊んでいたが、無言で黙々と動き回っていた1年10か月前とは違い、遊びながら「ブー」、「プー」などと、いろいろな音を試しているかのように発声していた。簡単な言葉を発せられるかもしれないと、Aちゃんの担任の先生は期待していた。また、いつも何となく笑ったような顔をしていたのとは違い、喜怒哀楽がはっきり表れるようになった。さらに、「欲しい」、「飲み物」などのマカトン・サイン⁽²⁾を理解できるようになった。これまでは何を話しかけても何の反応を示さなかったAちゃんが、家で「何が欲しいの?」というお母さんの問いかけに、「飲み物」とマカトン・サインを使って答えられたという。

3. 考察

当初、行動に連続性がなく、全く外の世界と関係を持たなかったAちゃんは、「思考のない(mindlessの)世界」⁸⁾(Meltzar, 1975)を生きていたと考えられる。この世界では、感覚器官から知覚されたものが統合されないため、心の中で物事のイメージを作り、保持することができない。その時その時の最も刺激的な対象に注意が向けられるだけで、焦点の定まらない世界を生きることになり、Aちゃんは外の世界と関係を持つこと、「遊ぶこと」ができなかったのである。そのため、セラピストはAちゃんの断片的な行為を音楽で繋ぎ合わせていくことで、彼女の散乱している意識を繋ぎ合わせていくことから始めた。Aちゃんが、音楽と一緒に激しく体を揺らした後に放心状態に陥った日、音楽と一緒になることによって、初めて自分というものを連続的に感じられたのではないかと考える。

自分を感じられるようになることで、外のものと自分の体験の関連性に気付くことができる(Stern, 1985)。自分が動けば音が鳴り、止まれば聞こえなくなる。そのことに気付くと、彼女は動いたり止まったりしながら、自分が音楽に影響を与えていることを実感し、音楽を思い通りにコントロールすることに夢中になった。外の世界との関わりを持つための「遊びの領域」が芽生えたといえよう。それによって、ピアノの鍵盤を押したり、バンバン叩いたり、楽器を何度も投げて音を聞くなど、Aちゃんは物を扱うようになった。また、私の真似をして鍵盤を押したように、興味あるものを自分の領域に取り入れることができるようになった。さらには、私の膝に乗って、バンバンとピアノを叩いたり、発声したり、音楽に合わせて体を振ったりなど、Aちゃんは音楽の感情的表現に自分を重ね合わせることができるようになった。ただし、それらは音楽との関わりであり、演奏している私よりも、聞こえてくる音楽がAちゃんには重要であるように感じられた。なぜならば、

私が彼女に向けて表現するものに対して、彼女から返ってくるような感覚が得られなかったからである。

しかし、お母さんがセッションに同席した日、お母さんのことが気になって、Aちゃんは楽器に触れなかったことにより、セッションのほとんどの時間を寝転がってお母さんを見詰める機会が得られた。私は、お母さんがAちゃんに向ける気持ちを音楽で表現しながら二人を繋いでいったが、Aちゃんはお母さんを見て、同時に音楽を聞き、視覚と聴覚の両器官からの情報が統合されたことで、お母さんを強く感じられたのではないだろうか。それが、笑顔という形でお母さんに返されている。最後のセッションでは、Aちゃんは私の膝の上で私の顔や髪の毛をなでたり、私の顔を見上げながら一緒に発声したりするなど、私と直接的な関わりを持てるまでになった。このように、Aちゃんは私の存在をしっかりと感じられるようになったことで、私の行為を取り入れて、私に向けて何かを返そうという意識が芽生えた、それが最後のマラカスのキャッチボールに示されていたと考える。

4. 結論

音楽療法において、遊ぶこととは、他者の態度を意識し、それを取り入れて自分の演奏や行動に反映させられる心理状態にクライアントを導くことである。Aちゃんの症例では、セラピストはAちゃんの「演奏できない」という症状に注目した。

セラピストは、音楽という媒体を用いてクライアントと接することにより、クライアントが他者といかに情緒的交流を持つのかを直接感じ取ることができる。Aちゃんの場合は、彼女と「一緒に演奏できない」というセラピスト自身の体験を通して、Aちゃんの障がいは、母親との一体感に喜びを感じ、それを求める最初期の母子関係以前の情緒的問題であると理解し、Aちゃんが必要とする援助を考えていくことができた。そして、情緒的に対応することで、Aちゃんがセラピストと一緒に発声や演奏をできるように導き、互いに情感を感じ合える体験ができるまでに至った。

これでAちゃんの障がいもたらす情緒問題が解決されたのではないが、Aちゃんは、音楽療法という場で、音楽の助けを借りたことにより、セラピストと情緒的な繋がりを持つことができた。音楽療法における「互いの領域が重なり合うことを容認し、受け入れて楽しむ」経験が、音楽療法外の人間関係にも反映され、Aちゃんのコミュニケーション力の向上に繋がったのだと言えよう。

謝辞

セッションを通して多くを教えてくれたAちゃん、そしてセッションの経過を症例として発表することを許可してくださったAちゃんのお母様に、心より感謝申し上げます。

注

- (1) 以前より、筆者はAちゃんの通う特別支援学校において、月に2回、グループセッションと個別セッションを行っていた。全児童とセッションを持つことは不可能なため、クラスの先生と相談しながら、コミュニケーション力発達のために特に支援が必要と思われる児童を対象に音楽療法を実践していた。グループセッションには、先生や介助スタッフも同席していた。
- (2) 言葉の発達の遅れている発達障がい者や知的障がい者等のために考案されたコミュニケーション方法である。「食べる」、「終わり」など、日常生活を送る上で必要な単語を、手の動きによるサインと言葉を組み合わせて表現する。

引用文献

- 1) Winnicott, D.W. (1971): *Playing and Reality*, London: A Tavistock/Routledge Publication. (橋本雅雄 (訳) (1979): 『遊ぶことと現実』, 岩崎学術出版).
- 2) Hobson, R. Peter (1993): *Autism and Development of Mind*, East Sussex: Psychology Press. (木下孝司 (監訳) (2000): 『自閉症と心の発達』, 学苑社).
- 3) Hobson, R. Peter (1993): Understanding persons: the role of affect (In S. Baron-Cohen, H. Tager-Flusberg & D. J. Cohen (Eds.), *Understanding Other Minds*, Oxford: Oxford Medical Publication, 204-227.
- 4) Trevarthen, C., Aitkin, K., Papoudi, D. & Robarts, J. (1997): *Children with Autism*, London: Jessica Kingsley Publishers.
- 5) Stern, D. N. (1985): *The Interpersonal World of the Infant: A view from psychoanalysis and developmental psychology*, New York: Karnac Books. (小此木啓吾・丸田俊彦 (監訳) 神庭靖子・神庭重信 (訳) (1989): 『乳児の対人世界: 理論編』, 岩崎学術出版社).
- 6) Pavlicevic, M. (1990): Dynamic Interplay in Clinical Improvisation, *Journal of British Music Therapy*, 4, 5-9.
- 7) Pavlicevic, M. (1997): *Music Therapy in Context*, London: Jessica Kingsley Publishers.
- 8) Meltzer, D. (1975): *Explorations in Autism*, London: Karnac Books Ltd.

参考文献

- Beyer, J. & Gammeltoft, L. (2000): *Autism & Play*, London: Jessica Kingsley Publishers.
- Dawson, G. & Lewy, A. (1989): Arousal, Attention, and the Socioemotional Impairments of Individuals with Autism (In G. Dawson (Ed.), *Autism: Nature, Diagnosis & Treatment*, New York: The Guildford Press, 49-74.
- Hobson, R. Peter (1993): *Autism and Development of Mind*, East Sussex: Psychology Press.
- Hobson, R. Peter (1989): Beyond Cognition: A theory of autism (In G. Dawson (Ed.), *Autism:*

- Nature, Diagnosis & Treatment, New York: The Guildford Press, 22-48.
- Kanner, L. (1943): Autistic Disturbances of Affective Contact, *Nervous Child*, 2, 217-150.
- Mundy, P., Sigman, M. & Kasari, C. (1993): The theory of mind and joint-attention deficits in autism (In S. Baron-Cohen, H. Tager-Flusberg & D. J. Cohen (Eds.), *Understanding Other Minds*, Oxford: Oxford Medical Publication, 181-203.
- Stern, D. N. (1985): *The Interpersonal World of the Infant: A view from psychoanalysis and developmental psychology*, New York: Karnac Books.
- Trevarthen, C & Aitkin, K. J. (2001): Infant Intersubjectivity: Research, Theory, and Clinical Applications, *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 42, 3-48.
- Winnicott, D.W. (1971): *Playing and Reality*, London: A Tavistock/Routledge Publication.
- 川瀬泰治 (1997) : 自閉症における自己と他者, 『別府大学紀要』, 39, 33-40.

執筆者の所属と連絡先

所属 : 鈴鹿短期大学 Email: takamatm@gmail.com

Practical Use of “Play” to Promote Development of Communication Skills

Considering the relationship between “performing” and “playing”
in music therapy setting

Makiko Takahashi

Abstract

For infants, ‘playing’ is a place to make connection between the inside and the outside world and to allow them to form social relationship with other people.

When infant’s playing overlaps with another’s, affective contact and mutual communication becomes possible. However, when ‘playing’ has not developed enough or has damaged remarkably, infant will have a difficult relating with people affectively and sharing experiences with others’ and he/she will be left in a socially isolated state. Therefore, if an infant cannot play, we need to lead the infant to be able to play in order to promote communication skills. In music therapy, ‘performing’ becomes a joint playing space. Therapist will tune in and interact affectively with the client and indicate how to communicate with others, through playing music.

In this paper, I will first examine the relationship between ‘playing’ and the ‘role of affection’ from Winnicott and Hobson’s theory and then discuss the connection between ‘performing’ and ‘playing’. Later, I will explore the practical use of music to promote communication skills through a case study of music therapy session with a child with autistic spectrum disorder.

Key Words: play, performing, communication, affective contact, music therapy